



TAGAME



柴田斗真

地方都市で暮らしていると、思いのほか、周りに自然が残っていてびっくりすることがある。

幹線道路沿いには、ハンバーガーショップやコンビニ、紳士服やカー用品のチェーン店が建ちならぶ一方で、一本道を外れるとまだまだ田畑の占める面積もおおきい。用水路沿いがあるけば、蛙やザリガニがふつうに目につくし、ゆうゆうとナマズが泳いでいたり、水面にスッポンが浮かんでいたりする。先日は風にそよぐ稲田でカブトエビの姿をみつけた。日本もすてたもんじゃないなあ、などと感慨にひたりながら、水草をさらう小川の流れをみているうちに、埃をかぶった記憶が泡のように浮かんでくる。

その昔は、もっと沢山の生き物を身近でみかけたものだが、それでもなかなかお目にかかれない奴もいた。水生昆虫の王者、タガメである。タガメは、カメムシ目・コオイムシ科の日本最大の水生昆虫である。田亀とも書く。将棋の駒を逆さにしたような身体から、屈強な前肢が鎌のように二本突き出ている。肉食性で、魚や蛙などを餌とし、図鑑などには、トノサマガエルを捕食する図柄が大迫力で描かれていた。豊かな自然に囲まれて育った僕にしても、その姿を目撃したことはなかった。いわば図鑑のなかにだけ生息する幻の昆虫だった。

ある日、おなじクラスの立花はじめが、そのタガメの、実物を幼稚園にもってきたのだった。成虫で体長は六センチくらいある。先生は、タガメはなかなかおらんよ、めずらしいなあと驚いていた。立花が父親と車にのっているとき、農道沿いの街灯のしたを這っていたらしい。教室の窓辺に、メダカやおたまじゃくしを飼っている大きな水槽があった。タガメは、小ぶりの飼育ケースから、水ごと水槽に放りこまれた。タガメは水中を斜めにすべりぬけて水草の端につかまり静止した。それまでは、僕が園内の小川で捕まえたミズカマキリがもてはやされていたのだが、見向きもされなくなった。ヤゴやゲンゴロウはいくらでもいたし、ミズカマキリもまあ珍重される部類ではあったが、圧倒的な存在感を放つタガメの前ではほとんど魅力を失ってしまった。

僕たちは水槽にはりつき、こげ茶色の、盾のようなと体躯とくの字に湾曲した巨大な前肢を飽くことなく眺めていた。おたまじゃくしがタガメの真上をとおった。そのとき、タガメは、あっという間の早業でおたまじゃくしを捕えた。二本の太い前肢ががっちりとおたまじゃくしに食いこみ、針状の口吻が、黄色い腹に突き刺さった。僕たちは息をのんで、目をあわせた。だれかが、残酷やと声をあげた。タガメにかかえこまれて、おたまじゃくしが小刻みに震えていた。

立花は得意げだった。もともと、なにかにつけて自慢したがる性質で、あまり好きではない。タガメ人気は、立花への称賛におきかえられた。みんなが立花にタガメを捕まえた具体的な場所をたずねた。水草のなかにミズカマキリがいた。どっしりと大きいタガメに比べて、いかにも華奢だった。水槽の中に厳然たる序列があった。僕は、休み時間になるたびに水槽の前にできる人垣を、複雑な気分でながめた。

そのころ、僕の隣りに水口さんという女の子がいた。おかつぱで目が細く、頬は赤く、いかにも田舎然としていて一もちろん僕も田舎者だったわけだが一無口でおとなしく、会話をした記憶はほとんどない。一度だけ、おはじきかなにかを忘れてきて僕が貸したことがある。その時も彼女はぺこりと頭をさげただけだった。

その日は運動会の練習があつて、帽子を忘れた僕が教室にもどったときのことである。ふと窓辺に目をやると、タガメが水槽のふちを這っていたのだ。だれかが蓋をしめわすれたらしい。僕はあわてて水槽に近寄り、タガメを水にもどそうとした。そのときある考えが僕にやどった。僕は、掌のなかでもがく水中の王者をじっとみすえた。交互に動く太い前肢と鋭い口吻がみえる。僕は窓から顔をだした。校舎に沿って用水路が流れている。初夏の日差しのなかで、両脇を草に覆われた水面が黒々としてみえた。僕は、しばし迷ったすえ、そのゆるやかな流れにむかってタガメを投げた。水に落ちたタガメは反転して草の影に消えた。兩岸にたれこめた夏草を黒い流れがさらっていく。僕は太陽を仰ぎ見てから校庭へもどろうとした。一瞬暗くなった教室の入口に水口がたっていた。僕は、おもわず、なにしとるんや、と声を荒げた。水口がびくっとした。僕はあわてて、俺を呼びにきたんか、とやわらかい口調にもどした。水口は首を横にふり、自分の机の横にかかっていた帽子を手にとった。水口も帽子を忘れたらしい。僕はいつからいたのか気になって、どう尋ねたものか考えているうちに、帽子をもった水口が教室からでていってしまった。僕は、暗い秘密をかかえて、校庭へもどった。

昼休み、教室は大騒ぎになった。だれかが床のうえにいるミズカマキリを見つけたのだ。そういえば、僕は蓋をせずに校庭にもどったのだった。ミズカマキリは水槽にもどされたが、タガメがいなくなっていることが判明した。立花は涙目になっている。だれが水槽の蓋を閉め忘れたのか犯人さがしの声があがった。僕は、水口を目で追いかけてながら同調した。水口の姿はみあたらなかった。僕は内心びくびくしながらも、自分にいいきかせた。蓋をしめなかったのは僕ではないし、僕がタガメをそのままにしておいたとしても、そのうち逃げたわけだから僕のせいではない。やがて先生がきて、不注意はだれにでもあるのだし、だれかを責めるのはよくないというようなことを説いて、騒ぎはおさまった。立花は泣いていたが、しょせん先生にとっては一匹の虫の脱走など些細なことにすぎないのだ。僕が疑われることもなかった。喧騒の去った教室の窓辺では、なにごとにもなかったかのように、水槽の水が午後の淡い光を反射していた。

その日の帰り道、タガメを放した用水路沿いを歩いてみた。僕の足音で蛙が水に飛びこむ。僕は水中で反転するタガメを思いだした。水口の細い目が、どこからかそれを見ていた。そのあとも、水口とは隣どうしだったが、それまでとかわらず会話はなかった。それはそれで都合がよかったのだが、水口をみるたびに、僕の気持ちはなんとなく落ち着かなくなるのだった。やがて席替えがあり水口と離れたときは、ほっとした。その年の秋に水口は転園していった。それと同時に僕のささやかな事件が終息した。

ふしぎだったのは、後年、おなじ小学校にすすんだ誰に訊いても水口のことを憶えていなかったことだ。たしかに目立たない存在だったとはいえ、おなじすずらん組だった奴も数人いたのだが。転園したから、卒園アルバムにも載っていない。だれしもの記憶は、日ごと上書きされ、感情のはりついたものだけが生き残っていく。その記憶の堆積こそが自分なのだ。立花の行方も

今は知らない。隣町の国立大学の附属小学校へ入学した時点で、ちがう世界の住人になった。立花がタガメを捕まえたという農道は、田んぼごと埋めたてられて、巨大なショッピングモールになっている。

そのあとも、水口とは隣どうしだったが、それまでとかわらず会話はなかった。それはそれで都合がよかったのだが、水口をみるたびに、僕の気持ちはなんとなく落ち着かなくなるのだった。やがて席替えがあり水口と離れたときは、ほっとした。その年の秋に水口は転園していった。それと同時に僕のささやかな事件が終息した。

ふしぎだったのは、後年、おなじ小学校にすすんだ誰に訊いても水口のことを覚えていなかったことだ。たしかに目立たない存在だったとはいえ、おなじすずらん組だった奴も数人いたのだが。転園したから、卒園アルバムにも載っていない。だれしもの記憶は、日ごと上書きされ、感情のはりついたものだけが生き残っていく。その記憶の堆積こそが自分なのだ。立花の行方も今は知らない。隣町の国立大学の附属小学校へ入学した時点で、ちがう世界の住人になった。立花がタガメを捕まえたという農道は、田んぼごと埋めたてられて、巨大なショッピングモールになっている。

TAGAME

<http://p.booklog.jp/book/87375>

著者：柴田斗真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/1127abcd/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87375>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87375>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ